



「見たり、聞いたり、探ったり」No.209

通算 No.361

青 木 行 雄

月報ご愛読の皆様へ

盛夏の候 ますますご清栄のこととお喜び申し上げます。

この度 通算30年に亘り毎月随想を投稿させて頂いておりますが、友人の勧めもあり書籍として、『木・氣・樹』を上梓致しました。

そして7月号に記載させて頂きました「美しき山国川」も私の作詞で「猪俣公章」氏の門下生であった梶原豊樹先生に曲をお願いし、芹洋子さんの歌唱でCDを全国発売する運びになりました。お陰様で好評を頂いております。

7月1日にスリランカ出身の「ウイッキーさん」の司会の下、明治記念館で記念祝賀会を開かせて頂きました。関係者の方々にお手伝い頂き、無事終了することが出来ました。ご参加頂いた方、ご協力頂いた方々に心から御礼申し上げます。有難う御座いました。

平成 29年 7月 10日 青木行雄

日青木材株式会社

03-3522-1181



※渡辺理事長発起人のご挨拶



※約400名参加者の明治記念館「富士の間」会場風景

「太田道灌」530回忌法要に参列 伊勢原市「蟠龍山・洞昌院」^{とうしょういん}

小田急線伊勢原駅下車、北口に向い「大山ケーブル」行きのバスに乗り、「道灌塚」で下車、法要の始まる、「洞昌院」^{とうしょういん}本堂へ1時間前に着いた。外から本堂に一礼して、周辺の史跡を見学し、控え室に入る。世話人が準備をされていて、部屋に通してくれた。法要と言うので黒い洋服にネクタイを用意し数珠も持って行ったが、ほとんどの人は平服で私だけが目立ったのでネクタイは取った。

太田道灌は7月26日に暗殺されたと言われているので、その前の日曜日今回は24日行われたのであろう。

正午、本堂で法要のお祓が始まった。およそ60人ぐらい参列、半分以上が「太田」の姓の方々であった。全国から参加しているようだ。

法要は30分ぐらいで終わった。そして本堂の前で集合写真を撮った。

この法要の案内の中に、「年に1回しかお会いできない人が多いので懇親の会を催したく思います。場所は伊勢原市内の料亭・小宮」とあり、車で来ている車に分乗して料亭に向う。

道灌公18代子孫、「太田資暁」氏の主催によるこの法要、懇親会最初の挨拶に、「本日はようこそお参りいただきありがとうございます。道灌公の530回忌に参列していただき、道灌公はさぞかし喜んでいる事と思います。又、2020年オリンピックの年にNHK大河ドラマ『太田道灌』を取り上げてもらうように交渉中であり、皆様も御協力お願いします」と挨拶があり、最後までなごやかな雰囲気での終止した。

太田道灌公について

道灌公は1432年(永享4年)相模に生まれた。幼名を鶴千代と言いその才は衆に超えていた。父の太田資清入道道真は武州川越の城主で文武の道に長じ、連歌の巨匠、心敬僧都や宗祇法師とも親交があった。父の道真は吾が子が己れの才に溺れることを恐れ9歳の時に鎌倉建長寺に托し、衆僧とともに勉学参禅の道に入らしめた。道灌13歳の時はすでに父道真の名に恥じない程の成長ぶりであったという。成人して資長を名乗ったが関東管領上杉持朝は深くその才



※洞昌院の表玄関の入口、両側の石柱には左側に蟠龍山・右側に洞昌院の文字が彫られている。



※洞昌院の本堂、かなり大型の本堂である。



※本堂の手前にある「太田道灌公之墓」で奥にいろいろと資料や石遺跡などがある。

を愛し、特に持の一字を与え、持資と名乗り、自らはその名をはばかり資長を用いた。現存する公の書状等は殆んど資長の名を用いている。

太田家の祖は源三位頼政で和歌の名手であったが、父の道真もまた連歌の名手として知られ、公は和歌の添削を飛鳥井中納言雅世卿に乞うている所から見てもその名は都の公家の間にも知られていたであろう。

当時関東公方足利持氏は将軍義教と争って鎌倉永安寺に亡び(永享の乱) 関東の実権は管領上杉家が握っていたが、持氏の子成氏が関東公方となるに及び成氏は上杉家と争って古河に移り古河公方と呼ばれた。足利義政の弟政知は新たに関東公方に任ぜられたが、鎌倉へ赴くことが出来ず、伊豆に留まり堀越公方となり、関東は古河、堀越の両公方と鎌倉にあった管領上杉氏の勢力が互に相對した。公は関東の和平を願って奔走し、江戸、川越、岩槻の三城を父の道真とともに築き関東の鎮めとし、また長尾景春の叛を討ち、再度上絡して勅答に和歌を以てするなど文武の名は遠く関西にまで及んだ。然し上杉家もまた山内、扇谷の2家に分れその勢を競うに至った。山内の上杉顕定は公の声望により扇谷上杉定正の勢力が強大になることを恐れ、奸策をめぐらして、公の主家である上杉定正自身の手によって相州糟屋の館に公を招き謀殺したのである。時に1486年(文明18年)7月26日、道灌公55才の働き盛りであった。

「寛永譜」に書かれている文面。

「文明十八年七月二十六日、相州糟屋定正ガ館ニ入テ 卒ス 公五十五歳 秋山村洞昌院ニ荼毘ス。」

「小沢家文書」にもこんな文面が。

小沢三郎次郎正実子小沢正住、相州大住郡糟屋邊豊岡(富岡)之館ニ蟄居仕罷在候処、文明十八年太田備中守持資之被頼同年七月二十六日糟屋ノ館ニ行籠リ討死仕候。

このような文面が残っていたと書かれている。



※道灌の墓と書かれた奥にある墓、長い歴史を物語っている。



※洞昌院の住職、法要の前の挨拶。



※主催者の「太田資暁」氏、太田道灌18代法要前の挨拶。

道灌公墓前に2株の古松の切り株が残っている。向って右のものは大正3年折損枯死したと言うが、年輪430まで数えられたと書かれている。道灌公二七日忌に詩僧万里集九は墓前に長文を捧げているがその文中に「亡心洗聲 非来非去 湛然円成 孫子百世 松秀柏萌 祭是不腆 云々」と述べているのを見るとこの松は寺伝で伝えられているように万里集九によって植えられたのであろうとこの寺の誌にかかれている。

道灌公が江戸城を完成したのは1457年(長禄元年)4月8日、26歳の時で、24歳の時にはすでに父道真の跡を受けて家督を相続し、扇谷上杉家の執事職となっている。早くから禅の道に入り京都、鎌倉五山の禅匠と深く交わったが、武州越生の龍穩寺三世泰叟妙康禅師について入道し、江戸に築城するや芝愛宕下に万年山青松寺を開いて禅師を講じたが、師はすでに老齢のため法嗣雲岡舜徳禅師を推挙した。時に公は45歳、舜徳禅師は38歳であったと言う。公は禅師について深く禅の道を究めたのである。

北条早雲は1476年(文明8年)、駿河の今川家の内紛を公の援助によって無事に治め、その功により興国寺城の城主にとり立てられた。上杉定正が没した翌年、1494年(明応3年)5月、上槽屋メ引の五霊社に道灌公を太田三徳命として合祀した。洞昌院の墓石はその折、北条早雲によって建てられたと伝えている。

「太田道灌公」についてまず知るには伊勢原市に行き、道灌塚・道灌墓のある、「洞昌院」を尋ねることから始まる。

さらに太田道灌公について詳しく記してみたい。

太田道灌は、扇谷上杉家に仕えた戦国武将である。

父資清が相模国の糟屋(現伊勢原市)に本拠を置いていたため、伊勢原市で生まれたと考えられる。(はっきりわかっていないようだ)

江戸城を築いたことで知られる道灌は、和歌にも秀でた文武両道を備えた武将であった。

晩年は、山内上杉家と扇谷上杉家との争いに巻き込まれ、1486年(文明18年)7月26日、その才能を恐れ



※本堂の中の法要風景、立派な本堂の中であった。



※ありし日の道灌公で、12代目(?)の方が書いたと言われる画、本堂の奥に飾られていた。



※法要の後の懇親会の会場。

た主君上杉定正(扇谷上杉)の糟屋の館(伊勢原市)におびき出され謀殺された。

道灌は、死の間際に「当方滅亡」と言い残したという。自分が死ねば扇谷に未来はないという予言だという。

のちに、関東は「北条早雲」によって攻められ、早雲の孫「氏康」によって扇谷上杉家は滅ぼされた。



※懇親会の会場風景、太田さんの名前が多かった。

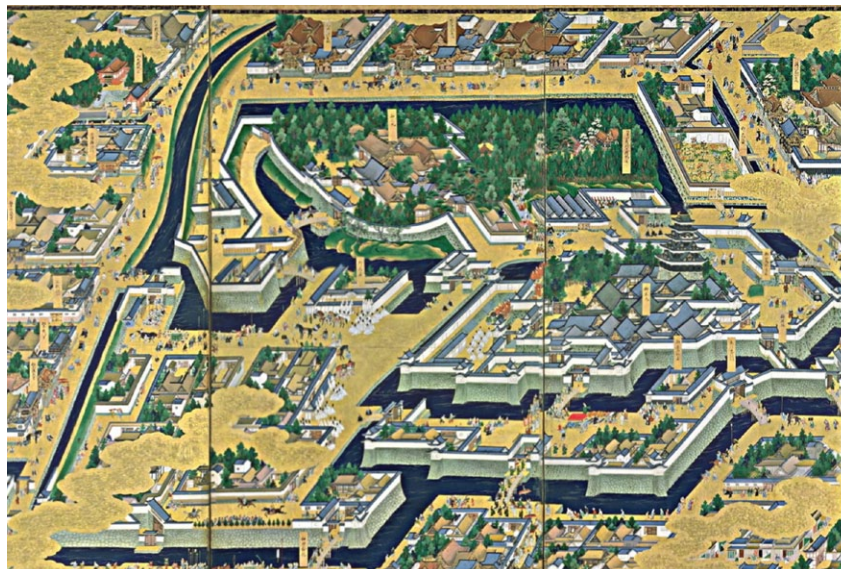
伊勢原市では毎年10月の第1土・日に「道灌まつり」が開催されている。

参考資料

洞昌院パンフ

日本史年表 岩波書店

平成28年7月28日記



江戸城

出典：<https://ja.wikipedia.org/wiki/>